

# トクニ田のジャズ

愛知県岡崎市の医師・内田修さんは、熱心なジャズ愛好家として音楽関係者の間で有名な人だ。渡辺貞夫、日野皓正らトップ・ジャズメンとの親交も深く、評論家としても活躍している。戦後、名古屋のジャズの歴史に少なからずかかわった内田さんが語る、ジャズと、その周辺――。

昭和六十一年四月十六日、広小路通、納屋橋のほとりにあるヤマハビル七階ホールは「ナゴヤ・ヤマハ・ジャズ・クラブ」(通称YJC)の例会で、独特の熱気に包まれていた。ここは収容人員二百人あまりの小ホールだが、鑑賞音楽としてのジャズを楽しむには、もってこいの大きさの上、二十年を超す歴史によってつくり出された、ある種の親しみとくつろぎさえ感じさせてくれるわれらジャズ仲間ホームグラウンドだ。僕は、ここでは、例によつ



ヤマハホールで演奏する左から加古隆、吉野弘志、村上秀一

てステージからは一番遠いけれど、ほんの少し高くなって席にすわって、ミニージャ

シャンたちの真剣なプレーに胸躍らせる思いだった。この一瞬は、元来照明用にとつてあるはずだが、格別な仕掛けのいらぬジャズの場合では、僕のお手伝いは名目だけで、ひや酒片手に勝手な物思いが許されているありがた

い席だ。会場の大半を占める若者たちにもじると、ひときわ目立つに違いない実年の男が、ステージ近くに陣取って、首

## 23年間続く コンサート

を振り振り陶醉しては、いざさが異様な雰囲気になりかねないのを心配しての、仲間たちの優しい心くばりかもしれない。おっと、こりゃひがみかな?

この夜の出演は「加古隆とそのグループ」。あまおなじみとは言えない名前だろうが、でも注意深くテレビをちら

屋に来るよう呼びかけた。ありきたりの楽器の組み合わせから生まれた音楽は新鮮で、これぞ「近未来のジャズ」と感嘆した。聞けば、商売にならないとかで東京ではコンサートをやってもらえ

うもないというお話だ。それなら芸どころ(？)名古屋では非とも聴かせて頂こうではないか。YJCの仲間たちの耳は肥えて、ちよつとつろさいんだよ。

僕らのコンサートは、まあこんな程度のいきさつから出来上がるんだが、それがつりつもって二十三年間。結局、その夜が第一二五回とい



内田修さん 昭和四十年五月五日、愛知県岡崎市生まれ。名古屋大学医学部を卒業、家庭医を兼ねて医師となり、現在内田病院院長。学生時代からのジャズ・ファンで「ナゴヤ・ヤマハ・ジャズ・クラブ」の名譽会長。「ジャズが若かったころ」(晶文社刊)などの著書がある。